
ポケモンマスターによろしく。

ケンコーホーシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモンマスターによるしく。

【Nコード】

N3272P

【作者名】

ケンコーホーシ

【あらすじ】

あの頃の僕たちは無敵だった。どんな奴が相手だろうと挫けることはなかった。僕たちの隣にはポケモンがいて、その事実だけあれば尽きない勇気が湧いてきた。現在、僕は働いている。劣悪な環境で苦痛を強いられている。ポケモンはすべて逃がしてしまった。

*本作品は、ポケットモンスターBW（ブラック&ホワイト）を原作とした二次創作です。原作のネタバレとなる内容を含みますのでご注意ください。

あの頃の僕らは無敵だった。
ジムリーダーも四天王もチャンピオンだって目じゃなかった。
ただひたすらに、強さだけを追い求めていた。

1

カノコタウンを出てからどれだけの時間が経ったのだろう。

「もう十五年か……」

もう十五年。十年とその半分。

それが、初めてポケモンを手にしてから、僕が積み重ねてきた年月だった。

僕は今働いている。ヒウンシティで製薬関係の仕事に勤めている。「まひなおし」の原価を今よりどれほど下げられるかが、僕たちのチームに課せられたノルマだ。職場環境は劣悪で、厳しく、たまには充実感を得られることもあるが、それでもやはり息苦しさの方が強い。こんな時、ポケモンがいてくれたら。そう思うこともしばしばある。

現在、僕はポケモンを持っていない。すべて、野生へと逃がしてしまった。

四畳一間の安アパート、その日暮らしの低賃金、昼夜が逆転したような生活。逃がしてなかったとしても、養いきることはやはり無理だっただろう。

ポケモンは生きている。捕まえるからには相応の責任が課せられる。

でも。しかし、それでもやはり、ポケモンのいない生活に寂しさを覚えることがある。時折、言いようのない寂寥感が、一人床につく際に襲ってくる。心の奥から。胸の内から。まるで発作のよ

うに僕を苦しめる。

僕は疲れているのだろう。それはよく理解できる。だが、理解できるだけであって、それはどうしようもない現実だ。抗い様のない、寒気すら覚える慈悲なき僕の世界。

それが、この僕『チェレン』が暮らす現在の世界だった。

2

ある夜。疲労した身体を引き連れて、帰宅すると、ふと、郵便受けに手紙が届けられているに気がついた。

またダイレクトメールの類いかと思ったが、どうも違う。手紙は小奇麗な便箋であった。惣菜とパックのご飯を解凍し、簡単な夕食を取り終えると、僕はベッドに寝転がりながら届けられた手紙を眺める。そして疑問に思う。

……なぜ、手紙？

それは不思議なことだった。メールやライブキャスターが発達しているこのご時世、手紙が送られるなど滅多にない。まずありえない。カゴメタウンで僅かに流通しているのを聞くくらいだ。しかし僕にはその町に知り合いはいないし、そもそも僕に手紙を交わす友人なんていない。

……いや。僕はアララギ博士のもとで研究に励んでいる『彼女』のことを思い出す。が、それはないだろう。彼女だったら手紙ではなくメールを送ってくるはず。見た目はとろいが、あれでいて中身は完全に現代っ子だ。彼女は違う。しかし、ならば誰だ？ 僕は疑問に思いながらも、結局、名前を見るという結論に達す。最初からそうすればいいのだ。僕はベッドで横になったまま、手紙の隅に書かれた宛名を読む。

そして、戦慄が走った。

全身に電撃を浴びたような衝撃。僕はベッドから跳ね起き、手紙を強く握りしめ、その内容を読みはじめる。

一度読み終えると、僕は呼吸を整え、再び読む。熟読する。脳に焼き付けるように読む。読む。読む。読む。

繰り返し、繰り返し、読み、読み続け、一通り満足すると、今度はその内容をひたすら頭の中で反芻させ、させ続け、その日僕は一睡もせずに徹夜する。

翌日、僕は仕事を早退した。数年ぶりの定時帰宅だ。手紙を片手に、僕は故郷のカノコタウンへ約半年ぶりとなる電話をかける。電話先はアララギ研究所。目的は決まっている。僕の親友『ベル』と連絡をつけるためだ。

3

「ああっ、チエレンだ！ ひさしぶり。元気だった？」

電話先の彼女の声は、元気そのものだった。

僕はその懐かしい声に心が震える。幸福感と寂しさでいっぱいになる。おかげで錯乱して、「そこそこだよ」と、自分でも中途半端だと思える答え方をしてしまった。

「そっか、そっか、よかった。最近連絡ないから大丈夫かなと思ってたよ」暖かな声。ベルの声だ。昔と変わらない。

「うん、ゴメン……。最近忙しくて」

「いいよ、いいよ、謝らなくて。私もお仕事忙しくてなかなか電話できなかったし」そういつてベルは苦笑する。

彼女、ベル。僕の親友。僕と同じ、図巻所有者にて、十五年前の『プラズマ事件』の関係者。去年、サンヨウシティの大学院で修士課程を終え、現在はアララギ研究所で見習いのスタッフとして働いている。

「この頃は、ダンゴロの発生起源において従来の定説を覆す、先進的な仮説を立ててね。アララギ博士もユニークだって褒めてくれるんだ」

そういつて屈託なく笑う彼女を僕は尊敬するし、誇りに思う。そ

して、そんな彼女だからこそ、僕はあの事実を伝えなくてはいけないと実感する。僕は僕の片手にある重大な事実を彼女に話さなくてはいけない。

「ねえ、ベル」

「ん？ どーしたの、チエレン？」相変わらず呑気そうな声。その声に癒された僕は彼女に告げる覚悟を決める。

「ねえ、ベル。僕のところに手紙が来たんだ」

「手紙？」不思議そうなベルに、僕は答えを提示する。

「そう手紙だ。『あいつ』からの手紙が来たんだ」

*

プラズマ事件。それは僕たちが凶鑑を所有し間もない頃。まだ僕らが最強だと信じてられた頃の事件。ゼクロムの復活。英雄の誕生。ポケモン解放宣言。プラズマ団。ゲーチス。七賢人。ブラックトリニティ。そして、N。

僕はその事件の目撃者であり証言者だった。偶然という軌跡を辿り、あの瞬間に、僕は立ち会うことになった。

そう、あいつが世界をかけて戦う瞬間を、僕は見た。

4

カゴメタウンから少しの処、ジャイアントホールと呼ばれる古い洞窟がある。隕石の落下によってできた洞窟とされており、以前は観光地として栄えたが、ポケモンの狂暴化に伴い、地元の人も殆どの寄り付かぬ秘境となっている。

そんな危険地帯を僕は一人で歩いていた。

洞窟内の気温は肌を突き刺すように寒く、足元はぬかるんでおぼつかない。普通なら人が訪れるべき場所ではない。

しかし、この秘境に、あいつは住んでいるらしい。

あいつ。僕とベルの親友。図巻所有者の一人。全ジムバッチ所持者。僕の知る限り最強のポケモントレーナー。

十五年前、プラズマ事件の後、奴は姿を消してしまった。

最初のうちは、僕やベルと会うこともあった。

しかし、ゆつくりと、そして確実に、奴はいなくなってしまった。連絡もとれなくなっていた。僕らがハイスクールに進学する頃には、あいつは完全に姿をくらませていた。

そして現在、約十五年ぶりに、奴からの手紙が来たのだ。手紙の内容は至ってシンプル。ただ、こう書いてあった。

最近、旅先でもの凄い発見をした。もうすぐ、ポケモンマスタ―への道が開けるかもしれない。

馬鹿だと思った。イタズラかと思った。でも安易に否定することができなかった。あいつの幻影がそれを許さなかった。否定できず、徹夜して考えた。不毛な考えをひたすらひたすら繰り返した。次の日には会社を早退し、半年ぶりに故郷へ電話していた。

そして、気づけば僕は三日間の有休を貰い、こんな処にまであいつを探しに来ている。僕は何をしているのだろう。仕事で痛めた腰を動かし、へとへとになりながら自問する。

同時に、奴の手紙にあった事柄について考えてみる。
『ポケモンマスター』という言葉について考えてみる。

5

「ベルは、ポケモンマスターって言葉についてどう思う？」

洞窟探検の前日。僕は一旦故郷へと帰り、半年ぶりにベルと再会した。

「ポケモンマスター？ それって手紙に書いてあった」

「そう、ベルはどういう意味だと思う？」

するとベルは、唸りながら困ったような顔をする。

「うーん、わかんない。私には、サトシくんが目指しているものってイメージしかないよ」僕も同じだった。

外国の人気アニメに、『pokemon』という作品がある。

ピカチュウを連れた男の子が、旅を続けて成長していく冒険活劇だ。そして主人公の男の子が目指しているのが、最強のポケモントレーナー、ポケモンマスターなのである。

「でも、ポケモンマスターなんて実在しない」

僕は言い切る。現実になんな職業は存在しない。今の時代、ポケモンは必要とされない。ポケモンは排除されている。ポケモンを使った職業なんて非常に限られてくる。

「最近じゃあ民営化の影響で、ポケモンセンターもみんな経営不振だ。どこもショップと提携してなんとかやりくりしている。ジム経営だつてそうだろ。ほとんどが兼業ジムリーダーだ。トレーナーなんて存在しない。こんな世の中だつてのに、ポケモンマスターだなんて……」

「でも、恰好いいよね」そういつてベルは微笑む。難しい顔の僕とは異なり、楽しそうな笑顔を浮かべている。

「カッコいいか？」「カッコいいよ」ベルは即答する。眩いくらいの表情。カッコいい？ 僕にはわからない。理解できない考えだ。ベルの考えも。あいつの考えも。

『あいつ』に会えたのなら、少しはわかるのだろうか。

6

「やあ、久しぶり。思ったより早かったね」

あいつがいた。雪原の中に。十五年ぶりの再会だった。

洞窟を抜け、開けた草原のような場所を奥へ奥へ、巨大な穴の下の雪原にあいつはいた。丸一日彷徨ってやっと会えた。すでにボロボロ。意識は朦朧。寒さで頭が鈍く痛む。

「疲れているみたいだね。それにここは寒い。ちょっと待ってて」
そう言っ、あいつはバッグから何か取り出す。モンスターボールだ。モンスターボールだと？ 僕は目を丸くする。キュウコンが現れ、暖かい光が辺りを覆う。

「ひでりキュウコン。6V性格おくびよう風船持ち」暗号のような言葉を奴は唱える。「来て。あつたかいよ」

なぜ？ なぜだ？ 驚きの光景に茫然とする僕は、あいつの言われるままに近くに腰かけた。暖かい。だが、驚きで僕の心臓はまだバクバクしている。落ち着かない。

「さて……なにから聞きたい」そして、あいつはそんな言葉で始めてきた。再会の挨拶もなにもなかった。あいつは十五年前と何も変わっていない。後ろに跳ねた髪、人懐っこそうな顔つき、自分勝手なものも昔と同じだ。

「あ、ああ、僕はお前に質問したいことが山ほどあるよ」僕は返答する。そうだ。僕はお前に聞きたいことがたくさんある。十五年。僕の人生の半分以上、積み重ね続けた多くの質問たちだ。それにお前は答える義務がある。

「けれど、それよりも最初に、僕はお前に質問したいよ」

だが。

だが。それよりも、僕は聞きたい。出会ってすぐに気づいた違和感。異様さ。その正体を僕は聞きたい。

「どうして、お前はポケモンをもっているんだ」

再び僕は問う。

「どうして、お前はポケモンを『解放』させていない」

*

プラズマ事件。それは僕たちが図鑑を所有し間もない頃。まだ僕らが最強だと信じてられた頃の事件。

僕はその目撃者であり証言者だった。偶然という軌跡を辿り、あ

の瞬間に、僕は立ち会うことになった。
そう、あいつが世界をかけて戦い、『敗北』してしまった瞬間を、僕は見た。

7

「その後のプラズマ団の行動は迅速だった。英雄化したNを旗印に一気に世論を味方につけて、イツシュ地方議会にポケモン解放宣言を承認させてしまった。おかげで今や一般人のポケモンの捕獲及び所持は禁止。ジム関係者や研究者など限られた人が申請しないかぎりでなくなっただけだ」

僕もベルもポケモンを解放した。敗北した僕らに逆らう術はなかった。その後、僕はポケモンを諦めて会社員になった。ベルはポケモンを諦めきれず、研究職を選びポケモンと関わっている。そして、あいつは姿を消した。

プラズマ団の目的は完遂された。
ポケモンは解放されてしまった。

僕たちは敗北してしまった。

「なのに、どうしてお前はポケモンを持っている」
そう問いただした僕に対し、あいつはただ「ついてきて」と言っ
ていきなり歩きだした。僕はそれについていく。到着した先は、神
秘的な洞窟の前だった。雪原の中の洞窟。

そして、あいつが口を開いた。

「ここには、伝説のポケモンが封印されている」

「伝説？」なんだって。伝説だと。この洞窟にいるのか。

「うん。この前ようやく発見した。これがチェレンに見せたかったものだ」あいつの声に熱が籠っているのを僕は感じる。伝説のポケモン。あの英雄と同じ伝説の……。

「ねえ、チェレン。ボクはあの戦いの後、誓ったんだ。このポケモンを捕まえて、『ポケモンマスター』になるって」

今、僕たちは空を飛んでいた。

「そらをとぶ」なんて十五年ぶりだ。風が耳に当たって少しだけ痛い。子供の頃は全然気にならなかったのに。

「おい、ブラック。あとどれくらいかかる！」

「一時間もあれば大丈夫。この子すごい速いから」

一時間。まだそんなにかかるのかよ。勘弁してくれと僕は思う。それまでこの鈍った身体がもてばいいが。

僕らは今、Nの城を目指している。目的は決まってる。あの英雄をぶちのめして自由を得るためにだ。

あの日、僕の親友『ブラック』はこう言った。

「英雄を完全に倒すにはね、ただ勝つだけじゃだめなんだ。その勝利に意味をつけなくちゃいけない。例えば、同じ伝説を持つ、英雄に匹敵しうる存在になる必要がある」

「そのための『ポケモンマスター』か」

「そうだ。ボクはこのキュレムと共に、真の英雄として、ポケモンマスターポケモン解放宣言を撤廃させる」

それは馬鹿みたいな空想劇だった。英雄を倒し真の英雄になるなんて。今やNは伝説的な存在だ。プラズマ団は政府公認組織で、ポケモン解放宣言は絶対法だ。でも、それでも面白いと思ってしまった。こいつなら。僕の親友ならできるんじゃないかと思ってしまった。そして思ってしまったら負けだった。僕にはついていくしか道はなかった。

僕らはNの城へと向かう。そこは地獄かもしれない。破滅しか待っていないかもしれない。でも、それでも、僕は親友を信じて、もう一度あの瞬間を見ようと思う。

親友が世界をかけて戦う瞬間を。

親友が世界をかけて勝つ瞬間を。

「ポケモンマスターによろしく。
執筆：ケンコーホーシ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3272p/>

ポケモンマスターによろしく。

2010年12月9日23時25分発行